
包括的心臓リハビリテーションを導入して(その有用性の検討)

平野 玄起 李 剛至 森 京子 土居 裕幸 山上 将央 白澤 邦征 岡本 文雄 大中 玄彦

(高槻赤十字病院 循環器科)

循環器疾患における患者教育は、各種ガイドラインにおいて、入院期より再発予防を目的として開始されることが推奨されており、運動療法に患者教育を加えた包括的なリハビリテーションは運動療法単独実施群に比べて73%死亡率を軽減するとしている。

当施設でも2014年7月より、循環器疾患に対し、包括的リハビリテーションを本格的に開始した。運動療法に加え、服薬指導と管理、生活指導および心理サポートケア、栄養指導を行い、医療者間カンファレンスおよび勉強会にて見解の統一、患者情報の共有を行っている。

包括的心臓リハビリテーション開始後は、患者の疾患理解やアドヒアランス、また健康改善に対するモチベーションが向上していることは実感される場所であり、また医療者側も個々の患者への病態の理解や、安全管理の意識が高まっていると思われる。果たして当院で行っている患者教育が、実際に虚血性心疾患の二時予防のための冠危険因子の改善に寄与しているのか、診療録より後ろ向きに調査した。

今回我々は2014年7月～2014年12月までの半年間に虚血性心疾患で経皮的冠動脈形成術を行った症例全例に入院期間中、包括的心臓リハビリテーションを行った。初回入院時と確認冠動脈造影検査入院時の冠危険因子の変化について、検査入院時2013年7月～2013年12月の包括的心臓リハビリテーション開始前の症例と比較を行い、その効果について検討を行った。